タイトル：2022 年度 研究セミナー （第 23 回）
日時：2022 年 12 月 17 日（土）～18 日（日）
場所：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 3 階マルチメディア会議室（304）

「1920 年代のソ連・イラン国境から見える、国境の急速な制度化と生態学的問題との相性の悪さ」
李 優大（東京大学大学院）

中東☆イスラーム研究セミナーに参加しようかどうか悩んでいる大学院生の方々には、是非とも当該セミナーへの参加をお勧めします。首都圏外で学ぶ方であっても、旅費が支給されます。特に、多くのファクトは集めたのだけれども、それらを、どのような方法論で、どのような順序で、どの部分に力点を置きながらまとめるのかお悩みの方には、このセミナーは、先生方から鋭くそして愛のある集中砲火を受けることで、散らかった自分の脳内を整理できるので、非常に有益な機会になると考えます。

私は、自分の指導教官から勧められて、中東☆イスラーム研究セミナーに参加しました。1920 年代のソ連・イラン関係を専門に学ぶこと早 6 年、博士 4 年となり、コロナウイルス禍やウクライナ戦争という研究活動に対する妨害を時にはもろに受け時には上手くかわしながらモスクワの多くの文書館で計 3 度、約 12 ヶ月にわたる史料調査をしてきたので、使える一次史料と文献は結構もっているが、その料理の仕方にあまり自信がないという状況でした。

セミナーでは、1920 年代にソ連とイランの当局による「多孔性」の著しい両国間国境の管理とそれにより生じる諸問題とをテーマとして、現在執筆中の博士論文におけるそのテーマの位置付けにも言及しながら研究報告を行いました。発表時間は 60 分あるので、普段の学会発表とは異なり、じっくり話せました。

問題は、その後の質疑応答の時間です。60 分と長く、参加されている先生方や他の発表者から数多くの質問や指摘を受けるので、脂汗をかきました。ただ、この時間になされる質問や指摘はどれも本当に有益なものです。研究発表に対する質問や指摘にしても、論文を出した後の査読所見にしても、そこで述べられる内容は、しばしば自分の研究の道標となり、研究方針に少なからずプラスの影響を与えます（ただ、仮に瑕疵がある場合その責任のすべては私に帰されることは言うまでもありませんが）。こうした優秀な研究者の方々とのやり取りを通じて、混沌とした頭がクリアになりました。

例えば、私の研究姿勢というか癖として、ある政策決定に潜むイデオロギー的側面を軽視するきらいがありましたが、ソ連という、実情はどうであれ明確なイデオロギーを標榜する国家の外交政策を研究するにあたって、そうした姿勢で研究に臨むと見落としてしまう論点もあるのではないかという指摘を受けました。その指摘は私の脳裏に鮮烈な印象を残しています。

また、専らロシア史や国際政治の分野に特化した学会における研究発表を繰り返してきた私にとって、中東地域に通じた研究者の方々が集まる当該セミナーで、今まで参加した学会ではまず出ないような質問や指摘を受けたことは、非常に新鮮で、同時に勉強不足を痛感する機会となりました。ロシア語を読むようにペルシャ語やテュルク系言語も読めるよう頑張りたいと改めて思う契機となりました。

このセミナーは、人的交流という点でも、今後の研究活動に資してくれたと思います。私は、ロシア・中東関係（特にソ連・イラン関係）を専門とすると言っても、やはりロシア帝国／ソ連／ロシア連邦に軸足を置いて勉強してきました。それゆえ、今後、中東研究者の方々とのお付き合いも必要になると思っていたので、このセミナーに参加したことは非常に良い機会になりました。休憩時間やセミナー後の懇親会で先生方とのお話から得られる情報も、有益でした。

以上、中東☆イスラーム研究セミナーに参加した感想をつらつらと記しましたが、院生の方々がこれをお読みになったことで来年度以降の当該セミナーへの参加に前向きになってくだされば、私としては幸いです。